

## 作品制作意欲と校外活動との関連

—作品展「ぬくもり」を通して—

葛西 美樹\*・工藤 寧子\*

The relationship between students' motivation  
for making handicrafts and extracurricular activities

—From the results of holding handicrafts exhibition “Nukumori”—

Miki KASAI\*・Yasuko KUDOU\*

Key words : 体験学習  
制作意欲  
教育効果  
作品展

Learning by doing  
Motivation for making  
Education effect  
Handicrafts exhibition

### I はじめに

本学では今年青森市浪岡交流センター「あびねす」より依頼を受け、地域資源活用研究センター事業の一環として家政学科作品展「ぬくもり」を6月2日より約一ヶ月間開催した。作品展を実施するにあたり作品展示・入替・来客者への説明を、毎年10月に開催される神無月祭（以下、学園祭）家政学科展示リーダーを中心に、家政学科2・3年生からスタッフを募り運営した。過去3回の作品展でも今回のように学生が展示・説明に参加し、様々な形で成果を上げてきた。

学園祭では、家政学科展示として毎年テーマを掲げ、研究物の発表や作品を制作し展示してきた。その作品は昭和60年から平成24年までで約100点に上り、大学内で保管しているが、在学生が制作した作品の展示のみのため、過去の作品を見る機会は少なかった。また来客者に対し、学生自身が制作にかかわっていない先輩の作品について説明をし、評価や感想を聞くこともほとんどなかった。そこで、この校外における作品展での経験が、学園祭の運営・制作・展示に効果をもたらすことを期待し、開催した。

学園祭終了後、実際に、作品への関心や制作意

欲が高まり、学科展示に効果がみられたのか調査を行い、二、三の所見を得たので報告する。

### II 家政学科作品展「ぬくもり」について

家政学科作品展は、平成10年12月に、それまで単独で行っていた東北女子短期大学被服科と合同で開催された作品展「ぬくもり」が始まりで、これまでに3回行われている。作品展の目的は、作品展示を通して東北女子大学家政学科・東北女子短期大学被服科について、一般の方々に広く知ってもらうことだった。

大学ブースでは学園祭で展示した作品約30点に加え、研究パネルも新たに構成し直して展示し、来場者の目を引き、ほぼ目的は達成された。特に青森市で実施した前回（平成14年12月 於青森市民美術館）は、それまでの弘前市内や短期大学秀芝寮での作品展とは違い、手芸作品に関心の高い幅広い層の来場者も見られた。

それ以降作品展は実施されていないため、在学生は作品展を実施していたことを知らず、当時の評価を知る機会もなかった。作品を何のために保管しているのかもわからないのが現状である。

### III 浪岡交流センターにおける作品展について

今回の作品展は従来の2日間の会期に比べ、長

\* 東北女子大学

期にわたるため、学生の講義に影響のない日に作品展示と入替作業をすることを前提に展示期間を設定した。また、会期中の土・日曜日には可能な限り学生スタッフが会場で作品説明を行うこととした。

展示作業については事前に担当教員が大まかな配置を決めていたが、作品が会場内で栄えるように学生同士で工夫しながら作業を行い、比較的スムーズに進めることができた。

一方、作品説明は学生が最も苦勞をした点である。10年前と比較し、被服製作に関する講義時間が削減されたため、学生自身が手掛けた作品は説明できるが、保管している過去の作品の制作工程や技法についてうまく説明できないことが展示作業中に判明した。そこで、説明スタッフとなる学生が、全作品の技法等について予備知識を得てから、作品展に臨んだ。

作品展の会期、スタッフの人数などは以下のとおりである。

- 会期：平成24年6月2日～6月28日
- 会場：青森市浪岡交流センター あびねす
- 作品点数：21点
- 展示作業日：6月1日9時～12時  
家政学科3年生13名、教員4名
- 作品入替日：6月19日9時～12時  
家政学科2年生14名、教員2名
- 説明スタッフ：延べ人数20名  
家政学科3年生9名、2年生11名
- 搬出日：6月29日9時～12時  
教員4名



写真1 作品展「ぬくもり」 展示風景

なお、6月21日からは短期大学被服科の作品も展示された。

#### IV 作品展の成果について

作品展において展示作業や説明を担当した学生スタッフを対象に、学園祭運営との関連性を知るためアンケート調査を行った。

##### 1. 方法

調査期間：平成24年10月（学園祭終了後）

調査方法：アンケート調査（質問紙法）

展示作品の写真を参照し回答

調査対象：作品展展示係、説明係41名

調査内容：10項目

- ・作品について（2項目）
- ・来客者からの評価について（2項目）
- ・学園祭との関連性（1項目）
- ・成長の実感について（2項目）
- ・美術館などの展覧会への関心（1項目）
- ・作品展、学園祭の感想（2項目）

##### 2. 結果及び考察

###### ①歴代の作品を見た感想

ほとんどの学生が過去の作品に強い印象を持ち、何らかのコメントを記している。「昔の作品はより細かく、難しい作品が多い」「見えないところまで細かく丁寧」「様々な技法を使っている」など技術的な面と「裂織・染色のデザインはどうやって決めたのか」「色使いがきれい」「こういう表現の仕方があると知った」など図案、表現の面からの感想が多かった。また、「作品制作だけではなく、研究もして、時間がかかったであろう」「先輩の努力が伝わってきた」「過去の作品が見られて良かった」など尊敬の念をもって作品を見ている学生も多かった。

###### ②特に印象に残った作品について

一番印象に残った作品は、平成2年度2年生が制作した「錦秋」で53.7%（22名）であった。切絵のように細かい所や絵画的で細部まで忠実に表現されている点が印象に残っていた（写真2）。



写真2 錦秋

二番目に印象に残った作品は、平成13年度3年生制作の「牧羊」で34.1% (14名) が立体感がある点が印象的と回答した (写真3)。



写真3 牧羊



写真4 藤たちの蒼夜曲

三番目は現3年生が昨年藤棚を表現して制作した「藤たちの蒼夜曲」で31.7% (13名) であった。色がきれいで迫力がある点が印象的と回答していた (写真4)。

以上のことから、色彩が鮮やかで、絵画的な作品が印象に残ることがわかった。

### ③来客者のコメントで印象に残ったこと

「手が込んでいてきれい」「学生の皆さんはすごいね」など作品に対する称賛のコメントが印象に残っていた。

### ④来客者と接して作品に対するイメージが変わった点

「質問に答えながら説明をし、お客様と一緒にじっくり作品を見ることで、素晴らしい作品だと気付いた」「説明をすることで改めて手が込んでいる作品だと感じるがあった」「自分が感じていた以上の感想をもらい、着眼点の違いに気付いた」「細部まで見るようになり、作品の視点が変わった」「染色までしていると感心されて、そんなにも手間がかかっていたのだと知った」など、学生は作品へのイメージだけでなく、作品を評価する方法も変わったようである。

### ⑤学園祭において作品展が役立った点

学園祭において、作品展での展示方法・掲示方法が役立ったと回答した学生が18名と最も多かった。次いで図案構成・デザイン13名、説明の仕方、作品の技法が共に11名の結果となった。

これを学園祭学科展示の係と比較すると、売品係は全員、被服係は1名以外が役立ったと回答している。それに対し、食物係では5名が特に役立ったことはないと回答した (表1)。作品展が被服系作品のみと考えれば当然の結果ではあるが、食物係でも「展示・掲示方法」「説明の仕方」「図案構成・デザイン」において役立ったと回答した学生が半数以上いるのは興味深い点である。

また、役立ったことはないと回答した6名のうち5名が作品展のみで説明係をしていない

ことから、来客者と関わることとの関連も予想される。

表1 学園祭で役立った点はあるか

(名)

係	項目	ある	ない	計
	被服	14	1	15
	食物	12	5	17
	売品	9	0	9
	計	35	6	41

#### ⑥2つの行事を通して自分が成長した点

95.1% (39名)の学生が成長したと回答し、特に3年生は全員が成長したと回答した。具体的には「コミュニケーション力」「積極性」「忍耐力」が挙げられ、「後輩や周りの人に気を使えるようになった」「率先して計画を立案し、皆を引っ張っていくという気持ちができる」「みんなで一つのものに向かう力がそなわった」と回答している。

自己肯定感やコミュニケーション力が低いと言われている昨今、自分の成長を感じる機会に恵まれたことは貴重な体験だったと言える。

#### ⑦2つの行事を通して成長した人はいるか

80.5% (33名)が自分の周囲に成長した人がいると回答している。その内容として「コミュニケーション力」「忍耐力」「積極性」が挙げられ、自己と同様、他者への評価も高いことがわかった。仲間の頑張る姿など、互いを認めることは今後社会に出る学生にとって大切なことである。

#### ⑧作品展の感想

全般に、作品展に携わることができて良かったという感想が多かった。具体的には、①の歴代の作品を見ての感想と同様、作品の緻密さや完成度の高さなど作品そのものに対する感想の他、「創作意欲が高まった」「刺激を受けた」「参考になった」「学園祭前に多くの作品を見て、学ぶことがあった」など学園祭の作品制作に向け意欲が高まったことが挙げられた。ま

た、「どのように展示するときれいに見えるか考えることができた」「ゆっくりと作品を見ることのできる空間だった」「作品がきれいに保管されていた」など、展示方法や保管方法に関する感想もあった。さらに、「歴代の作品や学生の作品も展示され、一般の方々に家政学科のことを知ってもらえた」「学外での作品展は多くの人に見てもらえて良い」「昔の作品を見る機会は貴重」と作品展の必要性を唱える意見もあった。

「お客様が感動しているのを見て自分も感動した」「先輩の作品と共に、私たちの作品が展示され、褒められて嬉しかった」「先輩の作品を褒められると、自分が作ったわけでもないのに嬉しかった」「たくさんの人とふれ合い、作品についても知ることができて良かった」「準備だけ手伝ったが、来客者の声を直接聴き取った」など、来客者との関わりについての感想も多かった。

#### ⑨美術館や博物館などに行くか

展覧会などに行く学生は12名、以前よりも関心が高くなったと回答した学生は23名で、半数以上が作品展後に関心が高まったことから、作品を鑑賞するという点で効果的であったと言える。

#### ⑩学園祭学科展示について

2年生は「展示方法や係の連携等学ぶことが多かったので、来年に活かしたい」「今後も作品を保管してほしい」「歴代の作品も何点が展示すれば良い」など、来年に向け前向きな意見や作品展の経験を活かす意見が多かった。

3年生は「もっと家政学科展示のすばらしさを伝えていきたい」「仲間と作品を作ったことは良い思い出、仲良くなれて嬉しかった」「どんどん技術が向上していくのを感じ、辛くなかった」「みんなと協力した甲斐があった」と満足感のある回答が多かった。

## V まとめ

作品展の開催とその後の学園祭活動との関連性



と成果について調査したが、作品展の開催は学生にとって大いに刺激になったようである。それは学生へのアンケート調査結果だけではなく、学園祭に向けて準備作業をする様子や、作品からも明らかである。

学生が最も印象に残った作品「錦秋」（前掲 写真2）の鮮やかな色や、陰影、葉や花びら一枚一枚の複雑な色が、今年の学園祭3年生作品「和彩～季節の足跡～」(写真5)の随所にちりばめられていた。

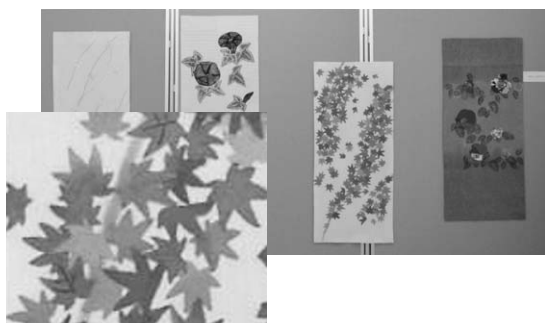


写真5 平成24年度学園祭 和彩～季節の足跡～

同様に、学園祭2年生作品「和のひととき」(写真6)は布をもちいて和菓子を忠実に表現している。実物により近付けるため、和菓子の種類や材料・季節の特徴などを調査研究後、和菓子店へ聞き取り調査を行い、それらの結果をまとめたパネルも作品と併せて展示した。



写真6 平成24年度学園祭 作品・研究テーマ 和菓子

これは作品展「ぬくもり」で印象に残った作品「牧羊」（前掲 写真3）とそれに関連した研究パネルおよび毛刈り体験した羊毛展示(写真7)に刺激を受けたことによるものである。



写真7 作品展「ぬくもり」 研究テーマ 毛

「研究・体験・作品への展開」の一連の流れが来客者に高く評価されたことと、学生自身の理解がより深まる展示方法だったことが理由で、作品展が作品制作や展示に大きく影響を与えたことがわかる。

作品制作においても、基礎技術の習得・確認などこれまで以上に積極的に取り組み、作品展の成果が感じられる学園祭家政学科展示となった。

以上のように、学園祭準備期間の学生の姿勢や制作した作品、展示方法からも作品展（校外活動）が制作意欲と関連があることがわかった。

また、「私たちが毛刈りの体験をしたい」という声が多数挙げられ、夏季休暇中でも行きたいという前向きな感想が多かった。最近では、余暇をアルバイトに費やす時間は惜しくはないが、時間外の学習や調査研究、読書は好まない傾向にある。その中で前向きな意見が見られたことは、大いに評価できる点である。

一方で、「就職に有利だから」という理由で授業を休み、ボランティアに精を出す学生も稀ではない。

元来、ボランティア活動は困った人のための手助けの「救済ボランティア」から始まったものである。しかし現在では「自分の人間性を高めるた

めの活動」をも意味する。

ボランティア体験を重視する傾向は一般企業に止まらず、教員採用試験でも半ば義務化している自治体もある。2011年の大震災以降、その傾向はますます増え、文部科学省から同年4月に震災ボランティアに出かける学生への配慮と単位化を促すことが各大学へ通達された。

今回の作品展に携わった学生は一般にはボランティアであるが、あえてスタッフと表現した。こ

れは、作品展の目的が「学園祭への学びの場」であり、単に自己を高めるだけでなく、これまで授業で学び得なかった専門的な学習をする機会、学習意識を持って参加すると捉えたからである。

作品展でスタッフとして活躍した学生たちは、互いに成長を感じ、認め合う関係を築くことができた。また、来客者や「あびねす」の職員の方との対話を通して、以前よりコミュニケーションがうまくとれるようになり、校外活動や体験学習が作品制作意欲はもとより、人間性・社会性を高める場となった。

これらのことから、作品展の開催は、学生の成長を促すきっかけとなり、学園祭運営に効果が見られた。作品展など、校外活動の定期的な開催が望まれる。

## 謝辞

作品展ぬくもりを実施するにあたり、これまで作品や研究パネルの制作をした卒業生ならびに在学生の皆様、制作指導・作品管理などに携わって来られた被服系の先生方、ご協力頂いた先生方に深謝いたします。



写真8 作品展「ぬくもり」 説明係学生の様子